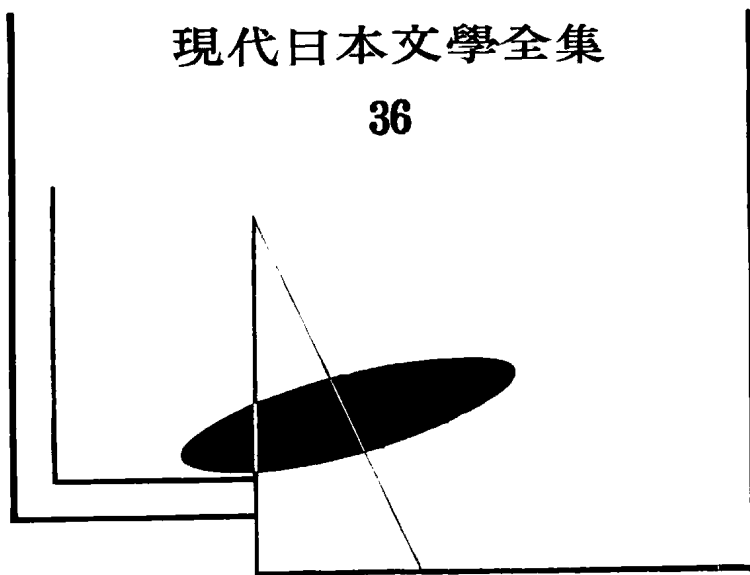




横光利一 集

現代日本文學全集

36



筑摩書房版

集一利光橫

昭和二十九年二月二十八日 印刷
昭和二十九年三月五日 發行

著者 橫光利一

發行者 古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 多田基
東京都新宿區改代町二三

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版株式會社 精興社
印刷多田印刷株式會社
製本美行製本有限會社

横光利一集 目次

上海	五
寢園	九二
紋章	一六三
御身	二六三
日輪	二九一
蠅	三二三
碑文	三二五
静かなる羅列	三二九
ナポレオンと田蟲	三三四
春は馬車に乗つて	三四〇
花園の思想	三四七

鳥	三五六
機	三六五
時間	三七九
榛名	三六七
秋	三九三
微笑	四〇一
横光利一（川端康成）	四一八
解説	四三五
年譜	四三三

装幀 恩地孝四郎

橫
光
利
一
集

蟻

臺止に餓
まて

月高し

横光

上海

一

満潮になると河は膨れて逆流した。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていった。海關の尖塔が夜霧の中で煙り始めた。突堤に積み上げられた樽の上で、苦力達が濕つて来た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が傾いてぎしぎし動き出した。白皙明敏な中古代の勇士のやうな顔をしてゐる參木は、街を廻つてバンドまで歸つて来た。波打際のベンチにはロシア人の疲れた春婦達が並んでゐた。彼女らの黙々とした瞳の前で、潮に逆らつた船舶の青いランプがはてしなく廻つてゐる。

「あんな、急ぐの。」

春婦の一人が首を參木の方へ振り向けて英語で訊ねた。彼は女の二重になつた顎の皺に白い斑點のあるのを見た。

「空いてゐるのよ、こは。」

參木は女と並んで坐つたまま黙つてゐた。灯を消して輯集してゐるモーターボートの首を連ねて、鎖で縛られた棧橋の黒い足が並んでゐた。「煙草。」と女は云つた。

參木は煙草を出した。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金もないと見えるな。」

「お金もないし、お國もないわ。」

「それや、困つたの。」

霧が帆船にからまりながら湯氣のやうに流れて来た。女は煙草に火を點けた。石垣に縛られた船が波に揺れる度毎に、船名のローマ字を瓦斯燈の光りに代る代る浮き上らせた。樽の上で賭博をしてゐる中國人の首の中から、鈍い銅貨の音が聞えて来た。

「あんな、行かない。」

「今夜は駄目だよ。」

「つまんないわ。」

女は足を組み合はした。遠くの橋の上を馬車が一臺通つて行つた。參木は時計を出して見た。甲谷の来るのはもう直ぐだつた。彼は甲谷に宮子と云ふ踊子を一人紹介される筈になつてゐた。甲谷はシンガポールの材木の中から、此の濁つた底知れぬ虚無の街の上海に妻を娶りに來たのである。濡れた菩提樹の隙間から、縞を作つた瓦斯燈の光りが、春婦達の皺のよつた靴先へ流れてゐた。すると、その縞の中で、ひと流れの霧が急がしさに朦朧と動き始めた。

「歸らうか。」と二人の女がいつた。

春婦達は立ち上ると鐵柵に添つてぞろぞろ歩いた。一番後になつた若い女が、青ざめた眼でちらりと參木の方を振り返つた。すると、參木

は煙草を銜へたまま、突然夢のやうな悲しさに襲はれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のやうに彼を見降ろして行つて了つたからである。

春婦達は船を繫いだ黒い繩を跨ぎながら、樽の間へ消えてしまつた。後には踏み潰されたバナナの皮が、濡れた羽毛と一緒に残つてゐた。突堤の先端に立つてゐる警邏の塔の入口から、長靴を履いた二本の足が突き出てゐた。參木は一人になるとベンチに凭れながら古里の母のことを考へた。その苦勞を續けてなほますます優しい手紙を書いて來る母のことを。——彼はもう十年日本へ歸つたことがない。その間、彼は銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペソ先で縫はされてゐただけだつた。彼は、忍耐とは、此の生活の上で他人の不正を正しく見せ續ける努力にすぎぬと云ふことを知り始めた。さうして、彼はそれが馬鹿げたことだと思ふ以上、いつの間にかだんだんと死の魅力に牽かれていつた。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死の方法を考へた。それが最早や彼の生活の唯一の整理法であるかのやうに。彼は甲谷を掴まへて酒を飲むといつも云ふのだ。

——お前は百萬圓掴んだとき、成功したと思ふだらう。ところが俺は、首を繩で縛つて、踏臺を足で蹴りつけたとき、やつたぞと思ふんだ。

彼は絶えずその眞似だけはやつて來た。しかし、彼の母が頭の中に浮び上るとまたその次の

日も朝からズボンに足を突き込んで歩いてゐた。
——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の
身體は親の身體だ、親の。俺は何んにも知るも
のか。——

參木に許されてゐることは、事實、ただ時々
古めかしい幼児のことを追想して涙を流すこと
だけだつた。彼は泣くときに思ふのである。

——えーい、ひとつ、ここらあたりで泣いて
やれ。——

それから、彼はポケットへ兩手を突き込んで
各國人の自棄糞な馬鹿騒ぎを、祭りを見るやう
に見に行くのだ。——

しかし、甲谷がシソガポールから來てからは、
參木は久し振りに元氣になつた。甲谷と彼とは
小學校時代からの友達だつた。參木は甲谷の妹
の競子を深く愛してゐた。しかし、甲谷がそれ
を知つたのは、競子が人妻になつて後だつた。
甲谷は云つた。

「馬鹿だね、君は。何ぜ俺に一言それを云はな
かつたのだ。云つたら、俺は。」

云つたら甲谷は困るにちがひないと、參木は
思つて黙つてゐた。そして、今までひとりひそ
かに困つてゐたのは參木である。だが、彼は今
は一切のことをあきらめて了つてゐる。——生
活の騒ぎのことも、彼女のことも、日本のこと
も。ただ時々彼は海外から眺めてゐると、日本
の蕭々として進歩する波動を身に感じて喜ぶこ
とがあるだけだつた。しかし、彼は最近、甲谷
から競子の良人が肺病で死にかかつてゐると云

ふ消息を聞かされてからは、身體から釘が一本
抜けたやうな自由さが感じられて來たのである。

二

崩れかけた煉瓦の街。其の狭い通りには、黒
い着物を袖長に着た中國人の群れが、海底の昆
布のやうにぞろり満ちて浣んでゐた。乞食等は
小石を敷きつめた道の上に、蹲つてゐた。彼等の
頭の上の店頭には、魚の氣胞や、血の滴つた鯉
の胸切りが下つてゐる。そのまた横の果物屋に
は、マンゴやバナナが盛り上つたまま、鋪道の
上まで溢れてゐた。果物屋の横には豚屋がある。
皮を剥かれた無數の豚は、爪を垂れ下げたまま、
肉色の洞穴を造つてうす暗く窪んでゐる。その
ぎつしり詰つた豚の壁の奥底からは、一點の白
い時計の臺盤だけが、眼のやうに光つてゐた。

此の豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の
看板のかかつた家の入口までは、歪んだ煉瓦の
柱に支へられた深い露路が續いてゐる。參木と
逢ふべき筈の甲谷はトルコ風呂の湯氣の中で、
蓄音器を聴きながら、お柳に彼の背中をマツサ
ーヂさせてゐた。お柳は富豪の中國人の妾にな
りながら、此の浴場の店主を兼ねた。勿論、お
柳は客の浴室へ出入すべき身ではない。だが、
彼女の好みにあつた客を選ぶためには、番號の
ついたその幾つもの浴室を遊ばせておくことは
不經濟には相違ない。

お柳は客の浴室へ來るときは前からいつも、
身體いつばいに豊富な石鹼の泡を塗つてゐた。

マツサーヂがすむと、主人は客の身體に石鹼を
塗り始めた。——間もなく二人の首が、眞面目
な白い泡の中から浮き上るとお柳は云つた。
「今夜はどちら。」

甲谷は參木と逢はねばならぬことを考へた。
「參木が突堤で待つてるのだが、もう幾時で
す。」

「さうね、でも、拗つといたつて、あの方ここ
らへいらつしやるに違ひないわ。それよりあな
た、いつ頃シソガポールへお歸りになるの。」

「それは分らないんですよ。僕は材木會社の外
交部にゐるもんですから、こちらのフイリツビ
ン材を蹴落してからでなくちや、と思つてゐる
んです。」

「ぢや、もう奥さまはお探しになりましたの。」
「いや、それは、まアさう急いだことぢやなし、
——何も女房のことなんか、今ごろ云はなくな
つて、良いでせう。」

お柳の泡がいきなり甲谷の額に叩きつけられ
た。スイッチがひねられた。壁から吹き込む蒸
氣と一緒に蓄音器がベリーマインを歌ひ出した。
それに合せて、甲谷は小さきみなステップを踏
み始めた。すると、ゆつくり絞り出された石鹼
の泡は、その中に包んだ肉體を清めながら、ぼ
たぼた白い花のやうに滴つた。やがて、蒸氣が
浴室に溢れ出すと、一面長方形の眞白な霧の中
に、主人も客も茫々として見えなくなつた。蒸
氣の中からお柳の聲が聞えて來た。
「あなたに馬券分けようか。」

「もうプレミヤムがついてるんですか。」
 「それや、つくさ。でも、負けてもいいわよ。」
 「ああ、苦しい、一寸その蒸氣、とめてくれないかな。」

「だつて、もういい加減に覺悟を定めるもんよ。ここぢや誰だつて、一度は死ぬほど苦しくなるんだから。」

そのまま、二人の聲は切れて了ふと、蒸氣もぷつりとまつてしまつた。

三

參木は疲れながらトルコ風呂まで歸つて來た。しかし、そのときはもう甲谷は參木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。參木は應接間のソファに沈み込んだまま黙つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ聲と一緒に、ポルトギーズの猥雑の歌が聞えて來た。時々蒸氣を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上の眞赤なチューリップが首を垂れたまま慄へてゐた。一人の湯女が彼の傍へ近寄つて來た。彼女は參木の横へ腰を降ろすと横目で彼の高く締つた鼻を眺めてゐた。

「眠いのかい。」と參木は訊ねた。

女は兩手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてるのかね。」

女が黙つて頷くと參木は云つた。

「ぢや、ひとつ頼まう。」

參木は前から此の無口な女が好きであつた。

彼女の名はお杉と云ふ。お杉は參木が來ると、彼女の肩越しにいつも參木の顔をうつと眺

めてゐるのが常であつた。間もなく湯女達が狭い廊下いつばいに水々しい空氣をたてて亂れて來た。

「まあ、參木さん、暫くね。」

參木はステッキの握りの上に頸を乗せたままじろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」

と、一人が云つた。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それぢや、風呂へでも入れて貰はう。」

女達はばつと崩れて笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて來た。參木は浴室へ這入ると、寢椅子の上へ仰向けに長くなつた。

皮膚が湯氣に浸つて膨れて來た。彼はだんだんに眠くなると、ふと此のまま蒸氣を出し放して

眠つてみようかと考へた。彼はスイツチをひねるとタオルを喰へて眼を隠した。身體が刻々に熱

くなつた。もし此のまま死ねたらとさう思ふと競子の顔が浮んで來た。債鬼の周章でた顔がち

らつた。残忍な事務の顔が。——事務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間

もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無數の顔が、暴風のやうに渦巻くだ

らう。だが、駄目だ。何もかも、人間の皺を製造するために出來てるのだ。——ドアが開い

かつた。誰でもいい。參木は眼を隠つたまま動かなかつた。空氣が幅廣い壓力で動揺した。すると

彼はいきなり、タオルで眼かくしをされてゐ

た。お柳だ。お柳なら、皺を延ばすのが商賣だ。
 「お杉さん。」と參木は故意にお杉の名前を云つてみた。

誰も彼には答へなかつた。參木はやがてお柳が自分に擦り寄るであらう誘ひをお杉が自分にするものとして思ひたかつた。いや、それよりお柳に、自分がお杉と遊ぶ樂しみを知らせたかつた。彼はまだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない。それ故お柳を怒らすことが、彼には彼女の慾情をますます華やかに感じる事が出來さうに思はれたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしながら、兩手を擴げて身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて逃さぬぞ。俺の手は蜘蛛みたいな手だから、用心してくれ。」

すると、彼の豫想とは反對に、急にドアが開いて誰か出て行く氣配がした。此の空虚な間に何事が起るのだらう。參木は暫くちつとしたまま、空氣に觸れる皮膚に意識を集めてゐた。と、突然、ドアの外で、荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ突き飛ばされた女があつた。すると、女は彼の足元で泣き始めた。お杉だ。——參木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に對して激しい怒りを感じて來た。だが、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つてゐた。參木は自分でタオルを解くと、泣いてゐるお杉の亂れた髪を眺めてゐた。彼はお杉に黙つて浴

室から出ると服を着た。それから、彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。お柳は笑ひながら這入つて来ると、白々しいとほけた顔で彼に云つた。

「まア、随分今夜は遅かつたわね。」

「遅いは遅いが、しかし、さつきはどうしたんだ。」

「何が？」

「いや、あのお杉さ。」と參木は云つた。

「あの子は駄目よ。意氣地が無くて。」

「それで、僕にひつつけようて云ふんかい。」

「まア、さうしてただけれや、結構だわ。」

參木は自分の戯れが間もなく女一人の生活を奪ふのだと氣がついた。彼がお杉を救ふためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼がお柳に頭を下けたら、なほ彼女はお杉を抛り出すに定つてゐるのだ。それなら、自分はどうすれば良いのだらう。參木は寢臺の上からお柳の片手を持つと抱き寄せるやうにして云つた。

「おい、お柳さん、俺がこんなことを云ふのは初めてだが、實は俺は、此の間から死ぬことばかり考へてゐてね。」

「どうしてそんなに死にたいの。」とお柳はひやかすやうに云つた。

「どうしてつて、まだ分らぬ柄でもないだらう。」

「だつて、あたしや、死ぬ人のことなんか分らないさ。」

「これほど情けを籠めてゐて、それにまださう云はれるやうぢや、もう俺も死ぬことも出来ぬぢやないか。いい加減に何とか、しかるべく云ひなさい。」

お柳は參木の肩を叩くと云つた。

「ふん、黙つて聞いてたら、女殺しのやうなことを云ひ出すわね。これぢや、あたしだつて死にたくなるわよ。」

お柳は立ち上ると部屋の中から出ようとした。參木はまたお柳の手を持つた。

「おい、何んとかしてくれ。このまま行かれちや、俺は今夜は危いんだ。」

「いいよ、あんたなんか死んだつて、くたばつたつて。」

「俺が死んだら、だいいちお前さんが困るぢやないか。」

「さアさア、馬鹿なことを言はないで、放してよ。今夜はあたしだつて、死にたいのよ。」

お柳は參木の手を振り切つて出ていつた。彼は此の馬鹿げた形の狂ひを感じる、お柳に對する怒がますます輪をかけて嵩じて來た。彼は寢臺の上へ倒れたまま、心をなだめるやうに、毛布の柔かな毛なみをそろりそろりと撫でてみた。すると、またドアが開いた。と、またお杉が突き飛ばされて轉んで來た。お杉は倒れたまま顔も上げずに泣き始めた。參木は彼女の傍へ近よることが出来なかつた。彼はただ寢臺の上から、お杉の倒れた背中のみくひくひく微動するのを眺めてゐた。彼は生毛の生えてゐるお杉の首もとから、黒い金魚のやうななまめかしさを感じて來た。彼はちかぢかとお杉の首を見よう

として降りていつた。しかし、ふと彼は、お柳がどこからか覗いてゐるのを嗅ぎつけると、また首をひつ込めた。

「おい、お杉さん。こつちへ來なさい。」

彼はお杉の傍へ近よると彼女を抱きかかへて寢臺の上へ連れて來た。お杉はすくみながら寢臺の上へ乗せられても、まだ背中を參木に向けたまま泣き續けた。

「おい、おい、泣くな。」と參木は云ふと、ひとり仰向きに寝ころんで、楽しむやうにお杉の顔を眺め始めた。

お杉は一寸參木の片手が肩へ觸れると、「いやだいやだ。」と云ふやうに身體を振つた。が、彼女は寢臺から降りようともせずに、袂を顔にあてて泣き續けた。參木はお杉の片腕を撫でながら、

「さア、俺の話を聞くんだぜ。良いか、昔、昔ある所に、王様とお姫さまがありました。」

すると、お杉は急に激しく泣き出した。參木は起ち上ると肩を纏めたまま、寢臺から足をぶらぶらさせて黙つてゐた。彼は天井に停つてゐる扇風機の羽根を眺めながら、どうして好きな女には、指一本觸れることが出来ないのかと考へた。これには何か、原理がある。――暫く彼は小首をかき上げながら、しゃくり上げるお杉の泣き聲を聞いてゐたが、

「さて、俺の帽子はどこいつた？」と見廻すと、そのまま部屋の外へ出ていつた。

甲谷は突堤へ行つたが參木の姿は見えなかつた。ただ掃除夫のうす汚れた赤い法被が、霧の中でこそごと動いてゐるだけだつた。しかし、なほよく見ると、菩提樹の下の眞暗なベンチの上で、印度人の髻が幾つもの鳥の巢のやうにかたまつて疎んでゐた。彼は芝生の先端を歩いてみた。二つの河の流れの打ち合ふ波のうへで、大理石を積んだ小舟がゆるゆると波にもまれて廻つてゐた。甲谷は、チューリップが圓陣をつくつて咲いてゐる芝生の中まで歩いて來た。すると、突然、彼は自分の美しい容貌の變化を思ひ出した。彼は直ぐ引き返すと、車を呼び寄せて宮子のゐる踊場の方へ走らせた。

——もし宮子が結婚しないと云へば、いや、何に、そのときはそのときさ。——

踊場の周圍には建物もたれ合つて建つてゐた。葛がその建物の割れ目から這ひながら、窓の上まで蔽つてゐた。踊場では、ダンスガールのきりきり廻つた袖の中から、アジャ主義者の建築師、山口が甲谷を見て笑ひ出した。山口は甲谷がシンガポールへ行く前の遊び仲間の一人であつた。甲谷は山口と向ひ合つて坐ると云つた。

「實に久し振りだね。此の頃は君どうだ。いつも見ても楽しさうな顔をしてゐるのは、君の顔だよ。」

「それが、見た通りの醜態だがね。ああ、さう

だ。參木に此の間逢つたら、君は嫁探しに來たつて云つたが、ほんたうかい。」山口は溢れるやうな微笑を湛へて甲谷を見上げた。

「うむ、嫁もついでに探していかうと思つちやゐるんだが、いいのがあるかね。あつたら一つ頼みたいね。もつとも、君のセヨンドハンドちや御免だぜ。」甲谷はにやにや笑ひながらホールの中を見廻した。

「いや、ところが、それになかなか話せる奴がゐるんだよ。オルガといふロシア人だが、どうだひとつ。參木の奴にどうかと思つたのだが、あ奴はああ云ふドン・キホーテで面白くないし、どうだ君は。——意志はないか。」と山口は眞面目な顔で相談した。

「ちや君にはもう意志はなくなつてゐるんだな。そのオルガといふのは？」

「いや、それやある、しかし、ああ云ふ女は他人のものにしとく方が、どうも面白味が多さうなんだよ。」

甲谷は山口の言葉を聞き流しながら、這入つて來るときから探しつづけてゐる宮子の姿をまた探した。だが、宮子の姿はいつまでたつても見えなかつた。

「しかし、僕の細君にして、それからまだ君が面目をほどこさうと云ふんぢや、それや、あんまり面白すぎるぢやないか。」

「いいぢやないか、細君なんかにしなけれや。倦きればまたそのときはそのときさ。まア、今はトゥエンティ見當の月給で結構だよ。」

山口は^脇をつきながら、甲谷のうろ、うろしづける視線の方を自分も追つた。外人達がぼつりぼつりとホールの中へ這入つて來た。

「ときに話は違ふが、古屋の奴はどうしてゐる。」と甲谷は訊ねた。

「ああ、古屋か、あの男は藝者の細君を月賦で買つては變へてるよ。」

「まだこちらにゐるのかね。」

「うむ、ゐる。前の細君だつてまだ全額拂込にはなつてゐないんだのに、また次のが、これが月賦だ。」

「御橋はどうした。」

「御橋も達者だ。しかし、先生、どうもあんまり妾を大切にするのでつき合ひ難いよ。あ奴も參木のやうな馬鹿者だね。」

しかし、甲谷は山口の話を聞かうともせず、うつろな眼で宮子はどうした、宮子はどうしたと絶えず思ひながらまた訊ねつづけていくのであつた。

「ふむ、木村はどうした。」

「木村には先日一度逢つたかな。奴さん、相變らず競馬狂でね、いつだかロシア人の妾を六人大競馬に連れつて、負け出したのさ。ところが、あの男は振つてる。負けたらその場で妾を一人づつ賣り飛ばすぢやないか。それでずつかり負けちやつてね、その日に六人とも賣つちやつて、まだお付けに上着からチョッキまで質に叩き込んで、さアてとか何んとか云つて澄してゐるんだが、先生が妾を持つのは、まアあれは

貯金をしてゐるやうなものなんだよ。俺もお蔭でだいぶん迷惑をさせられたが、オルガといふ女も、つまり、木村から處分されて来たもんだ。」

しかし、甲谷は別段面白くもなささうに、「君はこのごろどうしてゐるんだ。」としばらくたつてまた訊ねた。

「俺か、俺は此の頃は建築屋はそつちのけで、死人拾ひと云ふ奴をやつてゐる。此奴は骨の折れる商賣だが、なかなか文化に有益な商賣でね。一度俺と一緒に來ないか。面白い所を見せてやるよ。」

「それや、どう云ふことをするんだね。つまり死人の賣買か。」と甲谷は訊ねた。

「いや、そんな野蠻なもんぢやないよ。中國人から死體を買ひ取つて掃除をしてやるんだが、一人の死んで、生きてるロシア人の女を七人持てる、七人。それもロシアの貴族だぞ。」

どうだと云ふやうに山口の唇は歪んでゐた。

此の豪傑ならそれは平氣なことにはぢがひない、と甲谷は思つて踊りを見た。これはまた、うごんを握ねてゐるやうな踊りの隙から、樂手達の自棄糞なトランプが振り廻されて光つてゐた。すると突然、山口は踊りの中の一人の典雅な中國婦人を見つけて噤いた。

「あッ、あれは芳秋蘭だ。」

「芳秋蘭つて、それや何んだ。」と甲谷は初めて大きな眼を光らせるやうに山口の方へ首をよせた。「あの女は共產黨では、たいへんだ。君の兄貴

の高重君はあの女を知つてるよ。」

甲谷が振り返つて芳秋蘭を見ようとすると、そこへ、ほつそりと肉の緊つた、智的な眼の二重に光る宮子が、二階から降りて來て甲谷の傍の椅子へ來た。

「今晚は、お静かだわね。」

「うむ、いま細君の話をしているところだよ。」と甲谷は云つて手を出した。

「まあ、さう、ぢや、あたしあちらへ逃げてませう。」

宮子は身を翻すやうに、ひらりと盆栽の棕櫚を廻つていくと、甲谷はまた山口の方へ向き返つた。

「それで、さつきの死人の話だが、何んだか少し込み入つた話ぢやないか。」

「死人か。まあまあ、それより一踊りして來なさい。死人のことは後でもいいさ。」

「それぢや、一寸失敬。」

甲谷は宮子に追ひついて二人で組むと、踊りの群れの中へ流れていつた。宮子は甲谷の肩に口をあてて噤いた。

「今夜の足は重いわね。あたしはその人の重さで、何を考へてるのかつて云ふことが、まあだいたい分るのよ。」

「ぢや、僕は？」と甲谷は訊ねた。

「あなたは、奥様が見つかりさうよ。」

「左様。」
實は、甲谷は一人の死人と七人の妾について考へたのだ。——何んと奇怪な生活法ではない

か。廢物利用の極意である。甲谷はその話を聞くまでは、激しく宮子と結婚したい希望をもつてゐた。だが、七人の女と一人の死人の價値とを聞いてからは、妻帯者の不幸ばかりが浮んで來てならぬのであつた。踊りがすむと甲谷は山口の傍へ戻つて來た。

「君、さつきの死人の話をもう少し聞かしてくれよ。」

「まあ、さう急がなくなつたつて、死人はいつてもぢつとしてゐるよ。」

「ところが、貧乏だつて、ぢつとしてゐるさ。」と甲谷は云つてまた宮子の方をちらりと見た。

「だつて、君は貧乏してゐるやうには見えんぢやないか。」

「いや、それや、僕も僕だが、それより參木の奴のことなんだよ。あ奴をもう少し何んとかしてやらないと、死んで了ふ。」

「死ぬつて、參木の奴が？」と山口は頸を突き出した。

「うむ、あ奴は近頃、死ぬことばかり考へてるのだ。」

「ぢや、俺に金儲けをさせてくれるやうなものぢやないか。」

甲谷は足をばつと兩方へ擴げると、身を揺り動かして大きな聲で笑ひ出した。

「さうだ、あの男は、今に君に金儲け位はさすだらう。」

「それや、面白い。よし、そんならひとつ、參木を俺の會社の社長にしてやらう。」

甲谷は山口の豪傑笑ひの中から、參木に對するいくらかの友情を嗅ぎつけると喜び勇んで乗り出した。

「君の會社は何んと云ふんだ。」

「いや、名前はまだまだが、ひとつ、君から參木の奴に話してみてくれ。あ奴が死人になりたいなんて、それや、もつて來いの商賣だよ。」

「それで、その死人をどうする會社だ。」

「つまり、人間の骨をそのままの形で保存しとかうつて云ふんだ。これを輸出すると一人前が二百圓になつて來る。」

甲谷は二百圓もする會社の材木の太さを考へながら、

「しかし、そんなに人間の骨が賣れるのか。」と小聲で訊ねた。

「君、醫者に賣るんだよ。醫者ならそこは彼らの手先でどこへでも自由が效くのだ。もともと僕だつて、學術用に英國人の醫者から頼まれたのが初まりなんだ。」

甲谷は參木が人間製造會社の支配人に納まつてゐる所を想像した。すると、やがて、彼らしい幸福が、骸骨の踊りの中から舞ひ上つて來るのではないかと思はれた。

「それで踊りを見てゐて、よく骸骨に見えないもんだね。」と甲谷は肩を吊り上げて笑つた。

「それが此の頃困るんだ。俺の家の地下室は骸骨でいっぱいさ。生きてる人間を見てゐても一番先に肋骨が見えてくる。とにかく君、人間と云ふ奴は誰でも障子みたいに骨があるんだと思

ふと、をかしくなるもんだよ。」

笑ひながらアブサンを飲む大きな山口の唇が開きかかると、再びダンスが始まり出した。甲谷は立ち上つて彼に云つた。

「君、ひとつ踊つて來るからね、そこから骸骨の踊りでも見てゐてくれ。」

甲谷はまた宮子と組んで、モールの下で揺れ始めた男女の背中の中へ流れ込んだ。甲谷は宮子の冷たい耳元で囁いた。

「君、今夜は宜しく頼んでおきます。」

「何に？」

「いや、何んでもないさ。いたつて當り前のことだよ。」

「いやよ。風儀が悪いぢやないの。」

「だつて、結婚しなければなほ風儀が悪くなるさ。」

「もう、お饒舌しちや、塵埃を吸ふわよ。」

しかし、甲谷は山口の眼がうす笑ひを浮べて光つてゐるのを見る度に、いづれどちらも骸骨だと氣がつくやうに、激しく宮子の背中を人の背中で廻し始めるのであつた。そのとき、宮子は山口がしたやうに、急に甲谷の耳もとで小聲で云つた。

「あなた、ちよつと、あそこに芳秋蘭が來てゐるわ。」

甲谷は山口に云はれたまま忘れてゐた女のこゝとを思ひ出して振り返つた。だが芳秋蘭の姿はもう廻る人の輪の中に流れ込んで見えなかつた。「君、その芳秋蘭といふ女の方へ、僕をひつば

つていつてみてくれないか。さつきも山口がその女の事を云つてたが、何んだ。」

宮子は甲谷を引いて逆に流れの中を廻つていつた。甲谷はあれかこれかと宮子の視線のままに首を廻してゐるうちに、不意に背後の肩の中から、一對の中國の男女の顔が現れた。甲谷は吹かれたやうに眼を据ゑると宮子に云つた。

「あれか。」

「さう。」

甲谷は宮子を今度は逆に引きながら、芳秋蘭の後から廻つていつた。すると、くるくる廻る度毎に、芳秋蘭の顔も舞ひながら、男の肩の彼方から甲谷の方を覗いてゐた。甲谷はその美しい眼前の女性を、自分の兄の高重も知つてゐるのだと思ふと、かすかに微笑を送らずにはゐられなかつた。しかし、秋蘭の眼は澄み渡つたまま、甲谷の笑顔の前を平然と廻り續けて踊りが終んだ。——歌餘舞ひ倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一轉——。甲谷は徐校濤の美人譜中の一句を思ひ浮べながら、宮子にチケットを手渡した。

「あの婦人は實に綺麗だ。珍らしい。」

「さうね。珍らしいわ。」

宮子のむツと膨れかかつた口元を樂しげに眺めながら、甲谷は山口の傍へ戻つて來るとまた云つた。

「君、あの芳秋蘭といふ婦人は珍らしい。どうして君はあの女を知つてゐるんだ？」

「僕は君、これでも君の知らぬ間にアジャ主義

者のオーソリティーになつてゐるのだけ。此の上
海で有名な中国人なら、たいていは知つてゐ
るさ。山口は満面脂肪に漲つた顔を笑はせて秋
蘭の方を見た。

「ちや、僕は以後心を入れかへて君を尊敬する
から、ひとつあの婦人を紹介してくれ。」

「いや、それは駄目だ。」と山口は云つて手を上
げた。

「どうしてだ。」

「だつて、君を紹介するのは、日本の恥をさら
すやうなもんぢやないか。」

「しかし、君がもう代表して恥をさらしてくれ
てゐるなら、何も僕が晒したつてかまはぬだら
う。」

山口は虚を突かれたやうに大げさに眼を見張
つた。

「ところが、それが、僕のはお柳の主人の錢石
山に紹介されたんだからね。錢石山より、まだ
僕の方がましだらう。」

「ちや、今夜は思ひとまるとしようかね。」

甲谷と山口が、片隅の芳秋蘭のテーブルの方
へ視線を奪はれて黙り始めると、それに代つて、
宮子を張り合ふ外人達が、夜毎の騒ぎを始めて
快活に動き出した。山口は甲谷の腕を引くと、
宮子の方を向きながら云つた。

「おい甲谷、君はあの宮子が好きなんぢやない
か。」

「さう、まア、見た通りの所だね。」

「ところがあれば、腕が凄いいからやめなさい。」

あそこにある外人は、見てるとみなあの女の云
ひなりだよ。」

「ちや、君も一度は叩かれたことがあるんだ
な。」

「いや、あの女は、日本人なんか相手にしたら、
お目にかからんよ。あれはスパイかも知れない
ぜ。」

「よろしい。」と甲谷は云ふと、昂然と胸を反ら
した。

二人は煙草をとり上げて吸ひながら、暫く外
人達の宮子をからかふ會話に耳を傾けて黙つて
ゐた。

「あれは君、アメリカ人かい。」としばらくして
甲谷は訊ねた。

「うむ、あれはパーマーシツピルディングの社
員が二人と、マーカンティル・マリン・コンパ
ニーが一人だ。ところが、今日はこれならまだ
静な方で、ときどき宮子を中心に、ここで歐洲
大戦が始まることもあつたりしてね。それが樂
しみで、實はここへ来るんだが、あの女の本心
だけは流石の俺にも分らんね。」

山口はゆつくり首をめぐらせて、外人達から
芳秋蘭のゐるテーブルの方へ向き返つた。する
と、「おツ」と彼は云つて背を起すと、うろたへ
たやうに周圍をぐるぐる見廻しながら甲谷に云
つた。

「どこへ行つた。芳秋蘭？」

甲谷はそれには返事も返さず黙つて立ち上る
と、山口を捨てていきなり表へ飛び出した。芳

秋蘭の黄色な帽子の寶石が、街燈にきらめきな
がら車の上に揺れていつた。甲谷は黄包車と呼
びとめると、直ぐ帽子も冠らず彼女の後から追
つていつた。彼は車の上で上半身を前に延ばし、
もつと走れ、もつと走れ、と云ひながら、頭
中では芳秋蘭を追ひもせず、しきりにだんだん
遠ざかつていく宮子の幻影を追つてゐるのであ
つた。

——あの女は、あれは素敵だ。あれが俺の嫁
になれば、もう世の中は縮めたものだ。

ブリツヂ形の秋蘭の鼻は、ときどき左右の店
頭に向きながら、街路樹の葉蔭の間を貫いて沁
つた。唾を吐いてゐる乞食や、鋪道の上で銅貨
を叩いてゐる車夫や、口の周圍を光らせながら
料亭から出て来たお客や、煙草を喰へて人の顔
を見てゐる賣下者やらが、通りすぎる秋蘭の顔
を振り返つて眺めてゐた。甲谷は彼らがそんな
に振り返り始めると、ふと忘れかけてゐる秋蘭
の美しさを、再び思ひ浮べて彼らのやうに新鮮
になつた。ひき緊つた口もと。大きな黒い眼。
鷺水式の前髪。胡蝶形の首飾。淡灰色の上着と
スカート。——しかし、宮子は？ 彼女の周圍

では外人達が競つて宮子の嗜好を研究し、伸縮
自在な彼女の視線の流れを追ひ求め、彼女と踊
る敵の度數を暗黙の中に數へ合ひ、さうして、
ますます宮子を高く彼らの肩の上へ祭り上げる
方法ばかりをとつてゐる。しかし、あの女をシ
ンガポールへ連れていつたら、美人の少いシン
ガポールの日本人達は、ひつくり返つて騒ぐだ

山口はもう甲谷の歸りが待ちくたびれて、ホテルから外へ出た。金色の寢臺の金具、家鴨のぶつぶつした肌、切られた眞赤な水慈姑、青々と連つた砂糖黍の光澤、女の杓や兩替屋の鐵窓、玉菜、マンゴ、蠟燭、乞食、——それらのひつ詰つた街角で、彼はさてこれからどこへ行つたものやらと考へた。すると、トルコ風呂で背中をマッサージしてくれる度に、いつも羞しさう

らう。

甲谷はふと氣がつくと、秋蘭の車が、突然横から現れた水道自動車に喰ひ留められて停止した。すると、甲谷の車はその隙に割り込んで、秋蘭を追ひ抜くと同時に、自動車の側面に沿つて迂り出した。甲谷の追つて来た努力は、全くそこで停止させられねばならぬのだ。彼は振り返つて秋蘭を見た。彼女は背廣の青年を後に従へて、足を組み直しながら甲谷を見た。甲谷は彼女の顔から、一瞬、舞踏場の記憶を呼び起したかのごとき微動を感じた。しかし、甲谷の車夫は、並んだ自動車が急激に速度を出し始めると同時に、彼もまた一層速度を出して走り出した。秋蘭との距離がだんだん擴がつていつた。甲谷は再び振り返つて秋蘭を見た。だが、そのときには、もう秋蘭の姿は見えなくて、アカシヤの花蔭に傾いた青い壁が、瓦斯燈の光りを受けながら蒼ざめて連つてゐるのが眼についただけだつた。

に頬を赧らめてゐるお杉の顔が浮んで来た。數の羞を知らぬ放埒な女を見て來續けてゐる山口には、お杉の滑らかに光つた淡黒い皮膚や、臉毛の影にうるみを湛へた黒い眼や、かつちり緊つた足や腕などは、忘れられた岩陰で、蟲氣もなくひとり成長してゐた若芽のやうに感じられた。

——しかし、待てよ、あの女を嗅ぎつけてるのは、まさか俺だけぢやないだらう。——

山口は早くお杉を見に行かうと急に思ひ立つと、立ち停つて顔を上げた。すると、忽ち、もう先きから、街の隅々から彼の舉動を窺つてゐた車夫の群れが、殺到して來た。山口はうす笑ひを洩しながら、車夫の顔をずらりと見廻して、その一つに飛び乗つた。

山口はトルコ風呂へ着くと誰も人のゐない應接室へ這入り込んだ。ぢんぢんと蒸氣を出す壁の振動が、かすかに身體に響いて來た。彼はソファへもたれて煙草を吸つた。

しかし、前方の壁に嵌つた鏡を見つけると彼は立ち上つて口髻をひねくつてみた。すると頭の上の時計の音から、ふと家に一人殘しておいたオルガの姿が浮んで來た。オルガは昨夜、急に癩癩の發作を起して彼の手首に爪を立てたのだ。山口は手首の爪痕をカフスの中から出した、引つ込めたりしてみてゐるうちに、腹部を出して悶轉してゐるオルガの反り返つた咽喉が、お杉の咽喉に變つて來た。

「おい、山口君。」

突然、開いたドアの間から、甲谷の兄の長い高重の顔が現れた。山口は振り返つて煙草を上げた。

「暫くだね。さつきまで君の弟とサラセンで踊つてたんだが、あんまりあれは、上海へ置いてくといけないぜ。」

「ぢや、今夜弟はここへ來るんだな。僕はあ奴をこなひだから探してたんだが。」

「いや、それは分らんぞ。君の弟は俺をほつたらかして、芳秋蘭の後からつてつたままなんだよ。どうも手も早けれや足も早いよ。」

「ぢや、秋蘭は踊場にゐたのかい。」と高重は眼を見張つた。

「うむ、ゐた。實は俺も後からつけてみようと思つてたんだが、おさきに君の弟にやられたよ。」

高重と山口はソファへ並んだ。高重は突き出した淡い口髻の周圍をとがらせながら、黒い顔の中で、一層訝しさうに眉を皺めて云つた。

「秋蘭が今頃サラセンで踊つてるなんて、それはをかしいぞ。誰かゐるか、傍にロシア人でもゐなかつたか。」

「ゐたね。一人若い男がついてたよ。」

高重は東洋紡績の工人係りで、芳秋蘭は彼の下に潜んでゐる職女であつた。その職女が日本人經營の踊場へ來ることに關して、高重の理解し兼ねてゐることは、早や山口にも分るのであつた。

「しかし、いづれ秋蘭だつてスパイだらう。ど

こへだつて現れるさ。」と山口は云つた。

「ところが、僕の工場には今しきりにロシアの手が這入つて來てるのね。こ奴にはたまらんのだ。いつ爆發するか分らんので、實はひやひやしてゐるのだよ。手先の秋蘭は、どうも戦闘力が激しくつてね。」

「ロシアか、あれは不思議な奴だのう。わしにはあ奴は分らんよ。」

山口はまた立ち上ると、鏡を覗き込みながら、「どうです。高重さん、いつばい今夜は？」

「よろしいですとも。」

「それぢや、一つ。」

山口は好人物の坊主のやうな圓顔を急にてかてか勢ひ込ませると廊下へ出た。彼はそこで、お杉をひと目と、急がしさうに湯女部屋を覗いてみた。そこにもお杉がゐないと、今度は階段を二階の方へ三四段上つてみて、人氣のなささうな氣配を感じると、また浴場の中を覗き廻つた。

「駄目、駄目、今日は思惑計畫、一切手違ひといふところだ。」

「何をこそこそそこで狙つてゐるのだ。」と高重は云つた。

山口は高重には答へずに、表へ出ようとする時、湯女の靜江が這入つて來た。彼女は山口を見ると、いきなりびつたりと彼の胸にくつつくやうに立ちはだかつて、早口で云つた。

「あのね、今さきお杉さんが首になつたのよ。お神さんが嫉きもち焼いて、ほりだしてしまつ

たの。あの子可哀想に、しくしく泣いて出ていったわ。」

「どこへいつた？」山口は思はず外へ乗り出した。

「どこへつて、それがあの人、行くところなんかあれば誰も心配しやしないけど、そんなところはないんですよ。」

山口は後から來る高重にかまはず、急いで三四歩通りの方へ歩いていつた。しかし、勿論、今頃からお杉の行先なんか探したつて分らう筈もないのに氣がつくと、またくるりと廻つて靜江の傍へ引き返した。

「お杉の行先が知れたら、直ぐ知らせしてくれないか。分つたかい。」

彼は暗闇の方へ向き返つて、五ドル紙幣を靜江に握らせて、また高重の後を追つて來た。

「どうも今夜は、金の要ることばかりだよ。」

「何んだ。お杉つて？」

「いや、これがなかなか可憐な代物さ、甲谷が秋蘭を追つかけていきよつたから、そんなこつちを一つと思つたら、風呂屋のお神が首を切つて抛り出したとこだといふのさ。ひでえ野郎だ。」

高重は山口がお杉の家出で周章で出したのを見ると、お杉とはどんな女だつたのかと考へた。前に高重は妹の競子が娘の頃、彼女を山口にならやつても良いと思つたこともあつたのだ。その頃は、山口も競子が好きで、彼女を包む澤山の男達同様に、競子の後を暇さへあれば追ひか

けたのである。山口は大通りへ出ると、霧の深まつて來始めた左右の街を見廻しながら云つた。

「これからサラセンへいつても良いが、まさか甲谷は、今頃まで俺を待つてる氣遣ひもなからうね。」

「芳秋蘭を追つかけていつたのなら、ひよつとしたら、奴、今頃はやられてゐるかもしれないぜ。あの女はいつでもピストルを持つてるからな。」

「しかし、女に親切にして、撃たれたといふ話はまだ聞かんよ。それより君はどうなんだ。あの秋蘭は素晴らしい美人だが、毎日あの女を使つてゐるくせに、まさか金佛でもないだらう。」

「ところが、あの女は大丈夫だ。僕はその女の正體を、まだ知らないことにしてあるんだ。」

「それや、知つたら逃げられる恐れがあるからな。」

「冗談云つちや困るよ。僕はこれでも、今は日本を背負つて立つてゐるやうなものだからね。

僕があの人に少しでも引かれちや、忽ち工場は丸潰れだ。君のアジャ主義も結構だが、もう少しは、われわれ國粹主義者の苦心も、考へてくれたつて良いだらう。」

「國粹主義か、よく分つた。それぢや、いつばい飲んでからひとつ今夜は議論をしよう。お

いと、山口はステッキを上げて黄包車と呼びとめた。